

2019 年度ブラジル短期留学報告書

国際食料情報学部・国際農業開発学科 1年 國分童葉

私は2019年8月8日から8月28日まで、2019年度世界展開力事業ブラジル短期留学に参加した。

私がこのブラジル短期留学に申し込んだのは、実際にブラジルのアマゾンで行われているアグロフォレストリーを自分の目で見てみたいと思ったからだ。私は、高校生のときに世界中で進んでいる森林減少問題を知り、調べていくうちにアグロフォレストリーという農法を見つけた。森林を再生しつつ、農産物までも収穫できる農法に興味を持ち、「アグロフォレストリーと森林再生」という題で論文を作成した。しかし、アグロフォレストリーが実際に行われているのはアマゾンの奥地であり、私は書籍やインターネットからしか情報を得ることができず、自分の頭の中でしかアグロフォレストリーをイメージすることができなかった。そこで、この留学を通じて自分が高校時代に学んできたアグロフォレストリーを実際に本物と確認しつつ、さらなる研究をしたいと考えた。

ブラジルでの活動は、サンパウロ州のサンパウロ大学 ESALQ キャンパスとパラ州のアマゾニア農業大学ベレンキャンパス、アマゾニア農業大学トメアスキャンパスの見学とその各地域の住んでいらっしゃる東京農大のOBや日系の方々との交流が主であった。

ブラジルの到着してから三日間は、東京農業大学校友会ブラジル支部にお世話になった。東京農大のOBでブラジルに移住した人の多くが所属しており、多くのOBの方々と一緒にサンパウロ市内を見学した。サンパウロ市内にある野菜や果物などを販売しているお店が立ち並ぶマーケットに行き、そこでは多くのブラジルならではの果物を試食することができた。日本では食べれないような果物があったり、日本でも食べることはできるが味が全く異なる果物もあった。また、イピランガ公園内にあるブラジルがポルトガル植民地から独立したときに建設された独立記念像を訪れたり、ブラジル国内最大の日本人街であるリベルダーヂ地区を訪れ、ブラジル日本移民資料館を見学し、日本人移民の歴史を学んだ。



その後、サンパウロ市内を離れ、農学系の学部にて特化したサンパウロ大学 ESALQ キャンパ

スのあるピラシカバに移り1週間をそこで過ごした。ESALQ キャンパスでは、研究室や大学施設の見学、現地の学生と交流をした。私が一番驚いたのは、案内して頂いたほとんどの研究室の専門性が非常に高く、ほとんどの研究室が企業や政府から支援を受けて研究を行っていることだ。大学は研究で得た情報を企業や政府と共有し支援してもらうことでより高度な研究を行うことが可能になるし、企業や政府はその情報を用いてよりよい製品を作り出すことができるからだ。また、研究室見学を通じて、現地の学生と話す機会も多くあった。どの学生も流暢な英語を話し、サンパウロ大学のことについてや、自分の行なっている研究について教えてくれた。しかし、私の英語力の低さが原因で、疑問に思ったことや質問に対する答えをしっかりと相手に伝えることができなかった。自分の英語力の低さを実感したと同時に、英語の中でも特に、専門的な言葉に重点をおいて勉強する必要があると思った。大学見学の他にも、日本人が経営者であるコーヒー農場の東山農場を訪れ、900haのコーヒー農場を見学したり、コーヒーの収穫のしかたや歴史について学んだ。



サンパウロ大学の次は、パラ州のアマゾニア農業大学を訪れた。メインキャンパスがあるベレンでは、キャンパス内を見学し学長からお言葉を頂いた。ここで初めてアサイーを頂いた。アサイーはもともとパラ州の特産品であり、サンパウロなどのアサイーは、パラ州で作られたものを一度冷凍しているのでパラ州のものが一番美味しいそうだ。砂糖を入れずに食べるアサイーは甘みが一切なく、現地の人はそこに干し魚などを入れて毎食後食べるそうだ。そして、その後すぐにベレンから約200km離れたアマゾンで日本人が初めて移住した地であるトメアスーに移動した。初めにアマゾニア農業大学のトメアスキャンパスを訪れ、大学施設を見学した。キャンパスから少し離れた所に大きな農場があり、肥料会社から支援を受け、異なる肥料を与え農作物の成長具合をみる実験が行われていた。キャンパス見学の後は、トメアスーのトメアスー総合農業協同組合(CAMTA)を訪れ、トメアスーにおける日系人とCAMTAの歴史について乙幡理事長からお話を伺った。日本人は1929年にトメアスーに移住して、カカオや野菜などのいろいろな農作物の栽培を始めた。それらの栽培はうまくいかなかったが、1940年代コショウの栽培を始めると「黒ダイヤ」とも呼ばれるほど人気になり、大きな利益を得た。しかし、1970年代コショウが

病害に侵されるとモノカルチャーの危険性が指摘され、それ以来たくさんの種類の農産物を同時に混植するアグロフォレストリーが唱えられはじめたようだ。しかし、ここにアグロフォレストリーの意義について現地の人と世間の人に大きな誤解がある。現地の人々はあくまでもアグロフォレストリーを用いて、異なる時期に効率よく農産物が収穫できるので、経済的な安定を求めているのに対し、世間の人々は森を作るために現地の人々はアグロフォレストリーを用いていると思っている。私もどちらかという現地の人々は森林を再生させるためにアグロフォレストリーをしていたと思っていたのでこの事実にはとても驚いた。彼らは森を再生するというよりは経済的な面を重視している。CAMTA や JICA が主催で行われたアグロフォレストリーセミナーでは、農協組合員である小長野さんが行っているアグロフォレストリーを視察した。長い間実物を見てみたいと思っていた私にとって、それを見れたことはとても感動的なことであつたし、自分が想像していたアグロフォレストリーと実際は全く異なるものであつた。



最後は、トメアスーの二世である鈴木エルネストさんの家で3泊4日のファームステイをさせて頂いた。鈴木さんのお父様から引き継いだ630haもの農地の中で30人程度の労働者と共にアグロフォレストリーを行っている。鈴木さんは、アグロフォレストリーを異なるいろいろな場所でたくさん行っており、その中には、ブラジルの研究施設や化粧品の企業が実験的にアグロフォレストリーを行なっている農地もあつた。アグロフォレストリーは、たくさんの種類の作物が混植しているからこそ気をつけないといけないことがたくさんある。木と木の間隔や相性であったり、太陽光の調節のための選定、堆肥の種類など何度も実験を繰り返し、ベストなものを探し続けているようだ。



このブラジル短期留学を通じて私は、南米の貧しい農家さんを経済的に助けてあげたいと思った。今回はアグロフォレストリーを見に行くという目的ではあったが、実際にブラジルで移動中の車の中からファベラと呼ばれるスラムなどの貧しい農村を多く見た。ドライバーさんに伺った話によると、ファベラでは、電気や水などの公共サービスも受けることができない家庭がほとんどで、原因としては働き口が少ないことや、日給が少なすぎるのがあげられるようだ。可能であれば、アグロフォレストリーで富を得た日本人のように、ブラジル人もアグロフォレストリーで成功するように働きかけたいと思った。また、このブラジル短期留学を通じて、私は、たくさんの人と繋がることができた。私の所属する国際農業開発学科の前身である拓殖学科のOBの方々には特によくしていただき、いろいろなお話を伺うことができたし、トメアスーやサンパウロで出会った日系の方々には、ブラジルへの移民の歴史や当時の様子を教えて頂いた。また、サンパウロ大学やアマゾン農業大学で出会った学生は、同年代でありながらも強い志を持ちながら研究活動をしているのに感銘を受けた。3週間という短い間ではあったが、自分が今後何を勉強していく必要があるのかを考えることができたし、絶対にもう一度もっと自分自身が成長した状態でブラジルに行き、今回出会った人たちともう一度話してみたいと思った。

最後になりましたが、このブラジル短期留学の担当である酒井さんをはじめ、引率して頂いた田中先生と鈴木先生、心強い結束を見させてくださいました東京農大のOBの皆さま、ポルトガル語の話せない私たちにいろいろなことを説明及び通訳して下さった日系の皆さまに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

・持って行ってよかったもの、用意したがいらなかったものは特にないが、持って行ったほうがよかったものとしては、ファームステイの家族へのお土産や現地の大学で説明してくれたりした学生へのお土産がある。ファームステイへは、特に日系の家族が多いので日本の食材などを持っていくと喜ばれると感じた。また、現地の大学生には、小さいものでいいので日本の駄菓子など感謝の気持ちを伝えるためにも何か用意した方がいいと思った。

・現地で使用したお小遣いの金額は、およそ食費3万円、お土産5千円くらい。

・事前に勉強しておくべきことは、専門的な英語である。普通の日常会話以上に、説明される専門的な言葉がわからないと頭に何も入ってこないのが、農業系の専門的なボキャブラリーが勉強できていると現地の大学に行ったときにより理解しやすいのではないかと思った。